

「林 智子 つながりと関係性のコスモロジー」

【展覧会趣旨】

歴史的景観が広がる上賀茂地区に築 100 年を超える邸宅と蔵からなる瑞雲庵がある。かつてここに暮らした人々の気配が漂う空間は、内と外が緩やかにつながり、光や風、緑の香りが私たちの五感を心地よく刺激する。この瑞雲庵で京都を拠点に活動する美術家・林智子（1980-）の個展を開催する。

京都で染色を学んだ林は、これまで人と人とのコミュニケーションや親密性によって生まれる普遍的な感情をテーマに、時には先端的なテクノロジーを取り入れながら、身体性を介在させた作品を発表してきた。国内外での制作を経て、再び京都に戻った林は、豊かな自然と伝統ある歴史に触れるなかで、自然や環境との交感によって生じる多様な関係性を手がかりに、自己の存在の在り方に向き合うようになる。

ハイデガーは「大地、天空、神的なるもの、死すべきものを一体として取り入れることができる能力が家を建てさせた*」と述べた。本展で林は、かつて家であった瑞雲庵を舞台に、今は亡き祖父が残した日記を糸口として、現在も火山活動を続ける阿蘇山や、四季の移り変わりとともに咲いては散る上賀茂の花々や絶滅が危ぶまれる植物、豊かな生態系の宝庫である深泥池、彼女の創作源となっている華厳思想をモチーフに、写真や映像、インスタレーションやインタラクティブ作品を展示し、悠久の自然のなかで明滅する生命の律動、人間の営為や創造的行為について思考する。これらの作品を通して、本展ではコスモロジーとしての場所をテーマに、瑞雲庵を人間存在を思考する空間へと変容させることを試みる。鑑賞者はそこに立ち現れる新たな世界とどのような関係性を結ぶだろうか。

*講演会「建てること、住むこと、考えること」、ダルムシュタット、1951年。

【会期】2020年5月1日（金）—5月31日（金）（予定） 観覧料無料

【会場】瑞雲庵（京都市北区上賀茂南大路町62-1）

【主催】「林 智子 つながりと関係性のコスモロジー」展実行委員会

【助成】公益財団法人西枝財団

【協賛】塩野香料株式会社

【協力】京都府立植物園、公益財団法人京都市都市緑化協会、京都大学阿蘇火山研究センター、京都大学防災研究所、高野竹工株式会社、ハムズオフィス

【企画】芦田彩葵

【展示構成】

（1）物語のはじまり

瑞雲庵に足を踏み入れると、展覧会テーマの象徴となる太古からこの地にある石が出迎える。家に上がると、作家が生まれた1980年1月9日に亡き祖父が孫の誕生について書いた日記が表れ、祖父の足跡を辿る物語が始まる。

（2）大地と天空の共鳴

物理探鉱を生業とした祖父が撮った阿蘇の火山写真や地震計の記録紙が展示される。林が制作した鉱石ラジオからは、記録紙の波形によって生まれた音がかすかに聞こえる。観者は大地の原初的なエネルギーと電波によって伝わる音の神秘性に触れる。祖父が生きた時間と林が生きる時間が重なる。

（3）人間と自然の共生

京都府立植物園をはじめ上賀茂地区周辺の四季の植物から染色されたテキスタイルや、香気採取によるフレグランス作品を展示し、光や風のなかで移ろう作品を通して人間と自然の関係性、そこから生まれる美的感性に触れる。また日本最古の公立植物園、京都府立植物園に関するドキュメンテーションを展示し、自然と人間の関係や歴史、近代化の歩みとその問題について思考する。

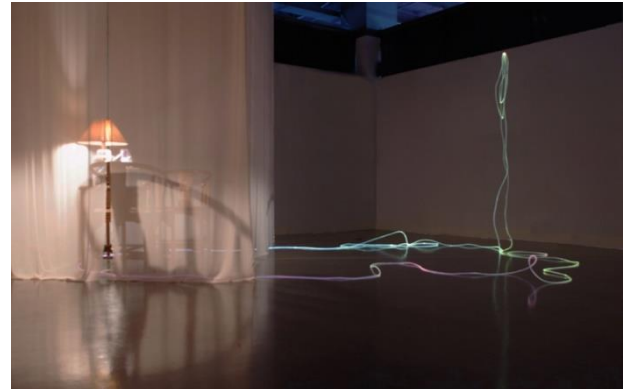
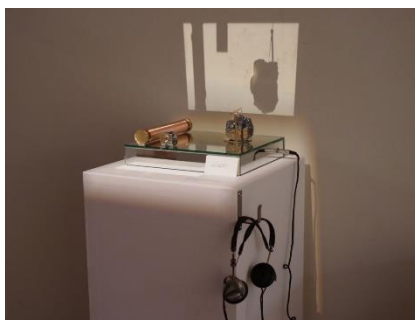
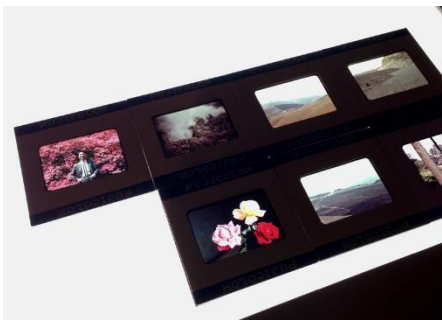
(4) 共存する時間

1 万年前から存在し、氷河期時代の生き残りとされる生物が生息するなど、今なお豊かな生態系に恵まれた深泥池を着想源とした写真や標本、テキストを展示することで、悠久の時間と共存する生命の律動にふれる。屋根裏の隠れ家では、今はもう会うことの叶わない人々へのメッセージが黒電話を通じて電波となり、鉱石ラジオによって音へと変化する。様々な時間軸の生命が交錯する。

(5) 森羅万象の世界 時空を超えて

母屋から庭に出て、植物に囲まれた小径を旅した先に蔵が表れる。蔵に入ると、二人の人間の瞬きのリズムが光となって表れては消える感情のゆらぎを表した作品が立ち現れる。奥に進むと、布や植物標本、ガラスやビーズによって作られた荘厳具・瓔珞^{ようらく}が表れ、森羅万象の世界へと観る者を誘う。人があらゆるものとなつて生きていることを体感し、人間存在について沈思する。

【参考作品】



上段左・中央・下段左 《Distance - aether》2015
上段右 《Tear Mirror - Jewel》2010-13
下段右 《Psyches》2018

【展覧会に寄せたアーティスト・ステートメント】

生から死へと向かって流れている我々ひとつひとつの生命は、互いに干渉し合い、補い合い、精妙なバランスの上に一回限り成り立って存在している。それは 38 億年続く命の明滅の中のほんの一瞬であり、繰り返しあり続けるものの一部でしかない。このことを我々は時に自然の驚異に遭遇することや、時に大切な人々の生と死に立ち会うことで改めて気づかされ、そのことにより、この広い世界の中での自分の立ち位置やその奇蹟的なつながりへの愛おしさを認識できるのではないだろうか。今回の展示では、この広い世界の中での自己の存在を確認する手立てとして、四季を通して変化する身近な自然の中の植物や現象、今は亡き大切な人々の記憶の断片や遺された品々など、声なきものたちとの交感を通して抽出されたモチーフや物語を、人の持つ野生的な感性と現代の科学技術とを織り交ぜて編集し、外と内、部屋と部屋とをゆるやかにつなぐ日本家屋の空間の中へインスタレーションとして昇華していく。時空を超えた様々な事象や現象を瑞雲庵という一つの小宇宙へ同居させることで、我々が失いつつある身体的な感性を通じたこの世界の在り方を浮き彫りにしていく。

【作家紹介】

林智子（はやし・ともこ）

アーティスト。1980年兵庫県生まれ、京都市在住。

京都精華大学芸術学部卒業（テキスタイルデザイン）、ロンドン大学セントラル・セント・マーティンズ・カレッジ・アート・アンド・デザイン修士課程修了（テキスタイルデザイン）。

主な展覧会に「タッチ・ミー」（ヴィクトリア&アルバート美術館、ロンドン、2005）、「現代美術の皮膚」（国立国際美術館、大阪、2007）、「スウィート・メモリー」（京都芸術センター、2011）、「Stance or Distance?」（熊本市現代美術館、2015）、「タオユアンアート×テクノロジー・フェスティバル」（タオユアン・アート・センター、台湾、2018）など。主なレジデンスにMIT Media Lab Europe, Dublin, アイルランド(2004)、Banff New Media Institute, Banff, カナダ (2005)、Distance Lab, Inverness, Scotland, イギリス(2008 - 2010)、東京大学情報理工学部 石川・妹尾研究室(2010 - 2012)、Santa Fe Art Institute、ニューメキシコ、アメリカ (2014)など。

【関連プログラム】（予定）

会期中には、本展覧会の企画意図や世界観への理解を深めるための展覧会プログラムを実施する。ゲストは京都を拠点に国内外で活躍する方々であり、瑞雲庵が人と文化の知的交流地となることを目指す。

・オープニング・パーティー

ゲスト：船越雅代（料理家、フードラボ「Farmoon」主宰）

京都を拠点に、国内外で食と文化をつなぐプロジェクトを行う船越氏を迎え、参加者が展覧会をイメージした創作料理を楽しみながら、本展作家とアートについて自由に語らう。

参加費：2,000円（フード・ドリンク付き）定員：20名（要事前申込）



・アーティスト・トーク

本展作家の林智子が展示構成や出品作品について語る。

・キュレーターによるギャラリー・トーク

本展を企画した芦田彩葵が展覧会の企画意図や作品について語る。



・トーク・セッション

ゲスト：稲賀繁美（比較文化学研究者、国際日本文化研究センター教授）

本展作家の林智子が創作源として関心を寄せる華厳思想について、現代美術と華厳思想の関係に造詣が深い稲賀氏をゲストに作家と対談を行う。

・染色ワーク・ショップ×京都府立植物園ツアー

講師：林智子（本展作家） 松谷茂（京都府立植物園名誉園長）

出品作品の着想源となった植物を使用して染色をする。完成後、地域に愛され日本初の公立植物園としても知られる京都府立植物園を訪れ、制作で使った植物について名誉園長である松谷氏の解説付きで鑑賞する。

参加費（500円程度、植物園入園料含む） 定員：12名（要事前申込）



・お茶会

講師：林智子（本展作家） 杉山早陽子（菓子工房「御菓子丸」主宰）

京都を拠点に、鑑賞から食すまでを一つの体験と捉えて和菓子作りを行う杉山氏を迎え、本展をイメージをした和菓子を制作する。完成後のお菓子はお茶会で頂く。 参加費（500円程度） 定員：12名（要事前申込）



※特に記載がないプログラムは無料、予約不要。会場は全て瑞雲庵。

【企画者紹介】

芦田彩葵（あしだ・あき）キュレーター。1979年兵庫県生まれ、宝塚市在住。神戸大学文学部卒業（美術史学）、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ・ディプロマ取得、神戸大学大学院博士課程修了（美術史学）。博士（文学）。専門は近現代西洋美術史および現代美術。2006年から2019年3月まで学芸員として熊本市現代美術館に勤務。現在は神戸大学で博物館学関連の教鞭をとりながら、神戸市の「Art Project Kobe 2019 :TRANS-」（新開地、兵庫港、長田エリア）および ICOM（国際博物館会議）京都大会記念事業「Contact」展（清水寺、三楽苑）にキュレーターとして参加。主な展覧会に「荒木経惟 熊本ララバイ」（2008）「花・風景—モネと現代日本のアーティストたち」（2009）「小谷元彦 幽体の知覚」（2011）「Welcome to the Jungle:熱々！東南アジアの現代美術」（2013）「Stance or Distance? わたしと世界をつなぐ“距離”」（2015）（すべて熊本市現代美術館）など。主な著書に『不朽の名画を読み解く』（共著、ナツメ社、2010）『美術史歴参』（共著、中央公論美術出版、2013）など。

【本展の狙いおよび期待される効果】

京都上賀茂の場所性と瑞雲庵の空間性に根差した、美術館やギャラリーのホワイトキューブでは実現できないサイトスペシフィックな展覧会を実施する。古民家がもつ特殊な時間軸と空間のなかで、林の作品を通して、来場者が自らを取り巻く人々、環境、そして広大な世界とどのようにつながり、どのような関係性を結んで存在しているのかを再考する機会となることを狙いとする。

林智子は国内外で作品を発表してきたが、本格的な個展形式での展示は今回が初めてであり、本展は貴重な空間でこれまでの彼女の作品をまとめたかたちで紹介する好機となる。また、展覧会の世界観を深化させる関連プログラムを開催し、京都で精力的に活動する若手創造者から国際的に活躍する研究者までを招聘することで、多様な人々が集う知的文化交流の場となることを目指す。

【作品制作および進行スケジュールについて】

出品作品の多くが本展のための新作となるが、既に作家は制作に取り掛かっている。新作の核となる1年をかけて京都府立植物園の四季の植物をモチーフとする染色作品やフレグランス作品については、京都府立植物園の協力を得てリサーチを行っている。またそれらの植物を香気採取する作品についても、海外で高く評価されるフレグランスを発表し、「あいちトリエンナーレ 2019」でのタニア・ブルゲラ作品での香料制作や、チームラボ等との協働作品を制作するキチベエ（塩野香料）が技術協力する。フレグランス作品については、会期中は窓を開けるため、ほのかな芳香となり、会場や来場者への影響はないと考えている。旧作を発展させたデジタル作品やラジオ作品については、これまでも林智子の作品に関わってきたエンジニアの菅原麻衣氏やハムズオフィスが技術協力を行う。

【展示について】

作家と企画者、映像作家兼デザイナーの中村太紀氏を中心に行うが、作家と親交がある京都の若手作家たちからの協力も得る。また作家の母校である京都精華大学からの協力も得る予定であり、学生たちにとって実際に展示に携わる機会を提供できればと考えている。会場にあわせたインスタレーションなどの展示があるため、展示作業期間として2週間をみている。展示の什器等については、本展のために特注するものを除いて既に確保しているが、メディア作品に関する機材などの手配が必要である。展示にあたっては、歴史ある古民家を使用させて頂くため細心の注意を払う。

【展覧会カタログについて】

西枝財団によって、展覧会終了後に、展示風景や関連プログラム、企画者や専門家による本展に関するエッセイを収録したカタログを発行予定である。